

保育構想案

奈良教育大学附属こども園

教諭 荒井 梨菜

1. 活動名 「ひつつきもつつき」 6月12日

2. 子どもの姿と読み取り 3歳児 いちご組（男児10名 女児5名 計15名）

- ・数人、保護者から離れる寂しさなどから登園時不安そうな表情を見せる子どももいるが、保育者とスキンシップをとったり話をしたりすることで気持ちがほぐれてくる。気持ちが落ち着くと保育者から離れ、自分のやりたい遊びをし始めている子どもが多い。保育者との心の結びつきが強くなってきていることで、安心感をもちながら遊び始めることができているようだ。【安心・安定】
- ・登降園の準備や給食の準備・片付けなど、身の回りのことを進んで行っている子どもが多い。個人差はあるが、1日の流れをある程度つかんでいることや、「準備が終わったら遊べる」「片付けが終わったら次楽しいこと（みんなと一緒にする活動）が待っている」といった見通しがもてていることが、そのような姿に繋がっていると考えられる。【主体性】
- ・「今日は〇〇して遊びたい」とやりたいことを決めて遊び始める姿や、友達や保育者がやっている遊びを見て自ら加わろうとしたりする姿がとる姿が見られる。遊び始めるまでの時間も短くなってきており、それぞれがやりたいことを見つけ、自ら遊ぼうとする気持ちが高まっているようだ【充実感・満足感】【主体性】
- ・三輪車や車で坂道を下り降りたり、砂場でごちそうを作ったり、ソフト積み木を高く積み上げたりなど、日をまたいで同じ遊びをする姿が見られる。使い慣れた用具や玩具を使って思いついたことをやってみる姿も見られる。「この遊びが面白い」と自分なりに実感しているからこそ、また同じ遊びをしたいという気持ちに繋がるようだ。【思いつく】
- ・進級児、新入児共に、遊びや生活の中で友達の名前を呼んだり、同じ場や同じもので遊ぼうとしたりする姿が見られる。友達や、友達がやっていることに対する興味や関心が以前にも増して強くなってきているようだ。また、ねこごっこやお医者さんごっこなどの遊びでは、1つのベッドに数人が集まりくっついて寝たり、保育者や友達とやりとりをしたり、ねこになっている友達にミルクをあげたり布団を掛けて撫でてあげたりしている。同じようなイメージの中で、友達や保育者とやりとりをすることやふれあうことを楽しみながら遊んでいる。【言葉・コミュニケーション】
- ・クラスのみ人と一緒にする活動では、にらめっこや手遊びをしたり、歌ったり、絵本を見たりおばけになって遊んだりしている。友達がしている動きを真似たり近くの友達と顔を見合わせて笑い合ったりなど、近くにいる友達の存在を感じながら遊ぶことが楽しいようである。【言葉・コミュニケーション】
- ・「ねえ、これ見て」「〇〇ちゃん一緒に遊ぼう」「ここはこうして欲しい」「さっき僕が使ってた」と、保育者だけでなく友達にも自分の思いを出す姿が見られるようになってきている。園生活に慣れ、安心して過ごせるようになってきたことで自分の思いを他者に出すことができるようになってきているようだ。【言葉・コミュニケーション】時には自分の思いが友達にきちんと伝わっておらずすれ違いが起こっていたり、思いがぶつかったりしていることもある。

3. めざす子どもの姿

友達や保育者とのふれあいを楽しむ子ども

4. 活動のねらい

(知識および技能の基礎)

身体の動かし方やバランスのとり方を知り、楽しんで表現しようとする。

(思考力・判断力・表現力の基礎)

どのようにしたら上手くひっつくことができるかを考えながら遊びに取り組もうとする。

(学びに向かう力・人間性等)

友達や保育者とふれあいながら遊ぶ中で、親しみや楽しさを感じ、相手の存在を意識しながら関わろうとする。

5. 評価規準

知識及び技能の基礎	思考力・判断力・表現力等の基礎	学びに向かう力・人間性等
身体の動かし方やバランスのとり方を知り、楽しんで表現する。 遊びのルールが分かる。	どのようにしたら上手くひっつくことができるかを考えながら遊ぶ。	他者とふれあう心地よさを感じる。 相手の存在を意識しながら関わろうとする。

6. 環境構成

○活動の設定理由

入園から1ヶ月が経ち、園生活に慣れてきた子どもたちは、友達に関心をもち始めている。ごっこ遊びでは同じイメージを共有して楽しんだり、狭い空間で身体を寄せ合ったりと、ふれあいの心地よさや一緒にいることの楽しさを味わう姿が見られるようになってきた。みんなと一緒にする活動でも、友達と顔を見合わせたり動きを真似たりと友達の存在を意識する姿が見られる。こうした関わりの芽生えをより広げられるよう、友達とふれあうことを楽しめる『ひっつきもっつき』の遊びを設定した。

○教材について

- ① 『ひっつきもっつき』は、歌やリズムに合わせて身体を動かしながら、友達や保育者とふれあい、心を通わせることができる遊びである。誰とでも簡単に始められ、くっついたり離れたりという動作を通して、他者と関わることの楽しさや安心感を味わうことができる。
- ② どこをくっつけるか（手、背中、足の裏など）を保育者が決めるだけでなく、子ども自身が自由に考えて決めたり、提案したりできることから主体的な関わりが促される。
また、くっつく部位を少しずつ難しくすることで、遊びが発展し、挑戦する気持ちや工夫も引き出される教材である。
- ③ 『ひっつきもっつき』はルールが簡単で分かりやすい遊びである。支援の必要な子どもも含めて、どの子どもも遊び方を分かって主体的に楽しめる活動である。

○展開の工夫

- ① 『ひつつきもつつき』は、身体の一部を他者とくっつけながら動く中で、ふれあいの楽しさや他者との関係の心地よさを感じられる遊びである。保育者は、基本的な遊び方を提示しつつも、どのようにくっつけるか、誰とやるかといった選択を子どもたちに委ねることで、主体的に遊びに参加できるようにする。
- ② 遊びの中で、自ら考えたり友達と相談したりする姿を受け止め、遊びが発展するような声かけや提案を行う。また、難易度の調整（動きを増やす・リズムを変えるなど）を段階的に行うことで、子ども一人ひとりが無理なく挑戦できるよう配慮する。
- ③ 保育者も一緒に『ひつつきもつつき』を楽しみ、自分から友達にタッチしに行きにくい子どもには保育者が進んでふれあいに行くなどすることで、段階を追いながら一人ひとりが他者とふれあうことの心地よさを味わえるようにする。

7. ESD との関連

○活動を通して養いたい ESD の視点

多様性・自分のクラスには色々な友達や先生がいて、クラスの友達や先生とふれ合うことが楽しい。
連携性・友達や先生と、体勢などを工夫することで身体をひつつけることができる。

○活動を通して育てたい ESD の資質・能力の基礎

コミュニケーションを行う力

→「座ったらくつつきやすいかも！」等、友達とやりとりをしながら、身体の色々なところをくっつけようとする

他者と協力する態度

→互いに動きを工夫しながら、身体の色々なところをくっつけようとする。（例えば足裏をくっつけるには、お互いが床に座った状態であるとくっつけやすい。）

進んで参加する態度

→クラスの友達や保育者に、自分からくつつきに行こうとしたり、次にくっつけたい場所を提案したりする。

○ESD で育てたい価値観の基礎

人権・文化の基礎 ありのままの自分で良い いろんな人と遊ぶことが嬉しい
幸福感に敏感になる クラスの友達や先生と一緒に遊ぶことが楽しい

○達成に貢献できる SDGs

- 10 人や国の不平等をなくそう
- 16 平和と公正をすべての人に

8. 構想と展開

- ① 保育者のもとに子どもを集める
- ② 『ひつつきもつつき』で遊ぶ
まずは自分の手や足裏を合わせる。保育者も前でやって見せ、楽しい雰囲気をつくる。
- ③ 次は友達や保育者と、身体をくっつける。手→ひじ→足裏→膝→お腹→背中
少しずつくっつける場所を難しくしたり、距離が近くなるようにしたりしていく。
子どもからくっつけたい部位のリクエストがあれば、そのリクエストにも応え、みんなでやって

みる。それぞれの工夫を認めたり、くつつくことができた嬉しさに共感する。

④保育者の近くに子どもを集め、みんなでやってみて楽しかった気持ちを共有する。